

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題	五カ年計画を可視化するーイゾスタとソヴィエトのインフォグラフィックスー
Title	
著者	河村彩
Authors	Aya Kawamura
出典	FLS言語文化論集 POLYPHONIA, , no. 14, pp. 1-20
発行日	2022, 3

五カ年計画を可視化する
——イゾスタトとソヴィエトのインフォグラフィックス——

河村 彩
(KAWAMURA Aya)

FLS 言語文化論集 POLYPHONIA 第 14 号 抜刷
東京工業大学 FLS 言語文化研究会
2022 年 3 月 15 日発行

五カ年計画を可視化する ——イゾスタトとソヴィエトのインフォグラフィックス——

河村 彩
(KAWAMURA Aya)

1930年代のスターリン政権下のソヴィエトでは産業の発達を写真やイラストによって示したアルバムが盛んに出版された。それらの制作に携わったのは、エリ・リシツキー、アレクサンドル・ロトチェンコ、ワルワラ・ステパノワら構成主義時代から活躍していた芸術家たちだった。コレクターであり芸術家のミハイル・カラシクはこれらの本を「祝典本 [парадная книга]」と呼び、極めて芸術性が高く技巧を凝らしたデザインが施されていることから、フランス等で盛んに制作されている「アーティスト・ブック」に匹敵するとしている¹⁾。これらのアルバムは第一次五カ年計画の成果が総括された1934年の第17回党大会の頃から盛んに制作されるようになった。アルバムの目的はスターリンの五カ年計画によって達成されたソヴィエトの成功を視覚的に示すことだった。

アルバムでは写真が主要なデザインの素材となっているが、しばしば統計データを絵や記号、地図によって表したインフォグラフィックスが挿入されている。これはソヴィエトでは図解統計 [изостатистика] と呼ばれ、全連邦ソヴィエト建設産業図解統計研究所 [Всесоюзный институт изобразительной статистики советского строительства и хозяйства] (通称イゾスタト) によって提供されたものだった。イゾスタトは1931年にモスクワに創設された科学的統計に関する研究所であり、設立にあたってはウィーンの経済学者オットー・ノイラートが協力した。ノイラートは画家ゲルト・アルンツの助けを借りて統計データを図で表す手法「ウィー

ンメソッド」を確立していた。彼はソヴィエト政府から招聘を受け、1931年から34年にかけてアルンツを含むウィーンの博物館スタッフとともに度々モスクワに滞在し、イゾスタトで仕事を行なった。1935年以降、イゾスタトは上記の五カ年計画の成果を示すアルバムに盛んに図解統計を提供するが、1940年には解体される。イゾスタトの図解統計は極めて芸術性が高く、ソヴィエト時代の視覚文化の一つとして注目に値する。だがこれまでのところ、2018年にロシア国立アーカイヴの協力をえて「シャプロフカ」ギャラリーで「イゾスタト」展²⁾が開催されたことを除いては、「イゾスタト」の出版物に焦点を当てた研究はほとんどなされていない。

本論文では、著者がロシア国立図書館で調査したイゾスタトの出版物を分析し、インフォグラフィックスがこれらの書籍の中でどのような役割を果たしていたのか考察する。第1節ではウィーンでのノイラートの活動と哲学的思想を分析し、彼がソヴィエトに滞在するきっかけとなったリシツキーの思想との共通性をも考察しながら、イゾスタトの図解統計の元となったウィーンメソッドの背景にある思想を考察する。第2節ではイゾスタトの出版物を分析し、ソヴィエトの図解統計がウィーンメソッドとは異なった特色を備えて展開されたことを明らかにする。そして第3節では社会主義リアリズムが公的な芸術様式となった当時の状況のもとで、図解統計がスターリン時代の視覚表象の一つとしてどのような役割を果たしていたのか考察する。

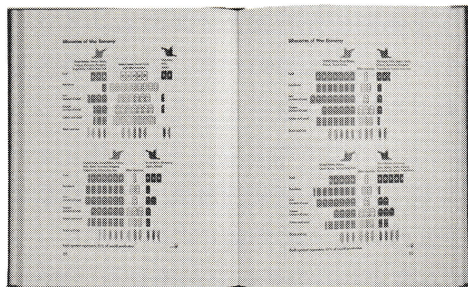
1. ノイラートとリシツキー

1882年ウィーンに生まれたノイラートはもともと経済学者であった。1910年に論考「戦争経済」を執筆した後、第一次世界大戦での兵役を経て、ドイツのライプツィヒの戦争経済博物館で館長を務めた。1918年8月に開催された「世界包囲網と戦争経済」展では、イギリス海軍による海上封鎖がドイツ経済に対してどのような影響をもたらしたかを、視覚的な資料によって示すことに成功した³⁾。その後もノイラートは博物館

での展示方法に関して様々な工夫を試み、それらの手法を規格化、体系化させることを通じて、ウィーンメソッドを発展させていく。

1918年11月にドイツ革命が起こると、社会主義に傾倒していたノイラートはバイエルンやザクセンで新たに誕生した社会主義政権に対して盛んに提言を行い、バイエルン中央経財省総裁に着任した。その後ドイツ革命が鎮圧されるとノイラートは逮捕され、1919年故郷のオーストリアに送還される。当時の「赤いウィーン」に帰還したノイラートは郊外住宅の建設運動に携わり、1923年に「第五回小菜園・ジードルング [集合住宅]・住宅建設」展を開催して住宅建設運動の成果を発表した。この展覧会では市庁舎ホールの壁面に住宅建設に関わる各種の図表が展示されて大きな話題を呼んだ。

自らの展示に手応えを得たノイラートは博物館の設立に向けて活動始めた。1924年に市議会から財政援助を受けてジードルング博物館を設立し、さらに1925年にはウィーン社会経済博物館を設立する。博物館は「社会衛生と社会保険」「精神生活と学校」「労働と組織」「ジードルングと都市計画」の4つの部門を持ち、各テーマに従って様々な社会事象が統計図表によって示されていた。ここでは社会学や経済学の各種統計データが物や人物や植物などの抽象的なイラストで分かりやすく示されていた。この方法は、ウィーンメソッドと呼ばれるようになり、ノイラートのイギリス亡命後にはアイソタイプ [International System of Typographic Picture Education] と命名された。【図1】



【図1】 *Modern men in the making*, 1939

社会主義者だったノイラートが「最新の経済的・社会的事実を一目で」示すウィーンメソッドによる展示を試みた背景には、労働者への啓蒙や教育を实践するという目的があった。ノイラートはウィーンメソッドを学校教育に導入するよう提唱し、国内外に普及させることにも熱心に取り組んだ。ノイラートが目指したのは、「言語の障壁」を取り除くことで、子供やリテラシーの低い人々を含む誰もが、現実の状況および自分の住む世界を科学的に理解できるようになることだった。「言葉は分断し、絵は統合する」が彼のモットーだった⁴⁾。

1929年に芸術家のゲルト・アルンツが博物館の正式なスタッフになると、ウィーンメソッドは進化を遂げた。アルンツは1910年代後半にはケルン進歩派の若い画家たちと交流し、表現主義の影響を受けた木版画の制作を行っていた。1925年にはケルンの「新書店」で初の個展を開催するが、そのとき友人の画家ザイヴェルトはカタログに寄稿し、アルンツの作品について次のように書いている。「彼はドイツ国内では珍しく、どの作品も感傷を排除して彫る。……単純さ、事実、それが全てだ。ここでは形はシンボルへと単純化されている」⁵⁾。この評価からは、アルンツが画家として事実を重視し形象をシンボルへと単純化する能力を持っていたことがわかる。アルンツのこの能力によってウィーンメソッドはいっそう洗練されたものになった⁶⁾。

1929年、ライプツィヒのビブリオグラフィ社はノイラートにアトラス「社会と経済」の制作を依頼した。この制作には、ノイラートとアルンツに加えて、統計の専門家、美術史家、地図製作者、デザイナーといった多様な人材が参加した。このような共同制作のスタイルにもノイラートの思想が反映されている。ノイラートは博物館の仕事は多様な技能を持ったメンバーが参加する集団作業でなければならず、そこでは「トランスフォーマー」が重要な役割を果たすべきだと考えた。トランスフォーマーとは、科学的な知識を容易に理解できる「視覚的現実」へと翻訳するための博物館スタッフであり、「専門家と一般公衆との間のギャップを橋渡しする」⁷⁾役割を担う。複雑な現実の社会的・経済的事象を、整理、

分析、編集することによって抽象的・視覚的なものへと「変形（トランスフォーム）」させるのが、ノイラートの考えるトランスフォーマーだった。

ところで、ウィーンメソッドという発想は当時のウィーンで展開された哲学の動向と密接な関係にあった。ノイラートは1929年に哲学者のルドルフ・カルナップと数学者のハンス・ハーンとともに論理実証主義を主張するウィーン学団を設立した。ウィーン学団は形而上的なものを退けて実証と経験を重んじ、哲学を科学化することを主張した。そしてすべての科学を一貫した体系で捉える「統一科学」を提唱した⁸⁾。

ノイラートは現実の事象は複雑で特定の姿を持たないと考え、そのような事象を論理的でシステムティックな「言語」によって解釈することを目指した。彼は次のように述べている。

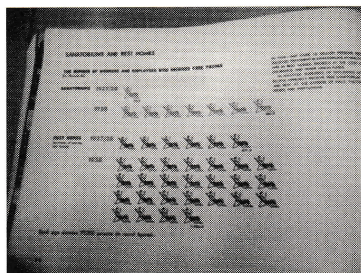
論理思考の科学は、科学の統合を可能にし、諸科学に「ひとつの言語」を与えるだろう。そしてアイソタイプシステムは、諸科学と世界の人々のための視覚補助言語として、「絵によるひとつの言語」の実現を可能にするのである。⁹⁾

ここからは、ノイラートはウィーンメソッドを、既存の言語や諸分野の間の障壁を取り除き、移り変わる現実の複雑な事象を統計と視覚的な「言語」によって説明するシステムとして考えていたことがわかる。このウィーンメソッドの志向はウィーン学団が論理実証主義によって目指していた「統一科学」と一致する。ノイラートは世界を解釈する一つの方法としてデータの視覚化・抽象化を考案したのである。

ノイラートのウィーンメソッドがロシアにもたらされるきっかけとなったのは構成主義芸術家のリシツキーとの出会いだった。1928年ケルンでのプレッサ展のためにヨーロッパに滞在したリシツキーはウィーンを訪れ、ノイラートと知り合った。社会主義に傾倒していたノイラートはソヴィエト連邦に強い関心を持っていた。一方アルンツもまた画家

としてリシツキーの幾何学的抽象画に強い興味を抱いていた。こうして1931年ノイラートがソヴィエトに滞在し、彼の尽力によってモスクワにイゾスタトが設立された。イゾスタトでは、ノイラートとアルンツのほか、数名の外国人スタッフが技術者として働き、ロシア人のリーダーによって4つの作業グループが形成されていた¹⁰⁾。

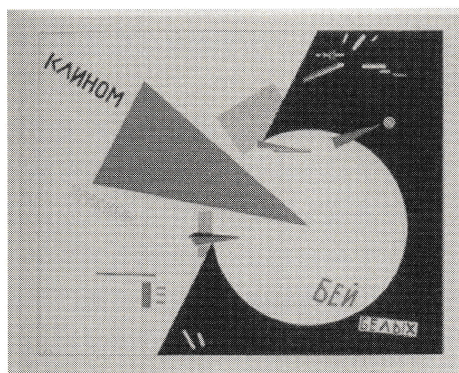
ノイラートはモスクワ滞在中もリシツキーと親交を結んだ。『ソヴィエトの亜熱帯』(1934)『社会主義の産業』(1935)など、リシツキーのデザインしたアルバムの多くには図解統計が挿入されている。中でも『ソヴィエトの国家体制と国民経済のイラストアルバム』¹¹⁾は本一冊が全てウィーンメソッドのみで編集されており、文章やイラストなどインフォグラフィックス以外の表現がない【図2】。このアルバムはリシツキーがロシアパヴィリオンのデザインを手がけることになっていた1939年のニューヨーク万博に合わせて出版された。このアルバムはノイラートがソヴィエトとの関係を絶ったのちに制作されているものの、ノイラートのウィーンメソッドに忠実に従って作られている。



【図2】椅子で休息する女性の絵によって、休暇を取る労働者の数が増えたことを示している。

ノイラートと同様リシツキーもまた、抽象的で単純なイメージによって情報を視覚的に伝達することを考えていた。彼はノイラートと出会う前から幾何学的な形態を用いたグラフィックデザインを試みていた。有名なポスター《赤い楔で白を打て》(1920)【図3】は、反革命の白軍を意味する白い円に、赤軍を示す赤い楔が打ち込まれ、白軍を打破しようとしている。また、絵本『二つの正方形の物語』(1922)は革命を象徴する物

語である。そこでは二つの正方形が地球にやってきて、黒を打ち砕き、社会主義を表す赤い正方形を地球に打ち立てる。リシツキーはスプレマチズム絵画のシステムを利用して革命を解釈し、幾何学的な抽象によって表現したのである。



【図3】

リシツキーは視覚的体系によって意味を表現するグラフィックを試みると同時に、言葉の機能を見直す主張を繰り返しておこなっている。彼は、現代では詩と広告において「思考と言葉 [речь] の新しい形式が開きつつある」と述べている¹²⁾。思考するための手段は言葉に限られないこと、言葉には意味だけでなく文字という形態の側面もあることをリシツキーは強く意識していた。リシツキーの論文「われわれの本」(1926-27)では、表音文字であるアルファベットは、絵に由来するヒエログリフや漢字などの象形文字が持っていた、見れば誰でもわかるという性質を失ってしまったことが指摘される。そしてこの失われた可能性を獲得することこそが「今日の本の可能性」だとリシツキーは述べる¹³⁾。リシツキーはノイラートと同様に、一目見れば誰でもわかるような表現、つまりリテラシーの高くない読者でも瞬時に理解できるような視覚的表現方法の可能性を探求したのである。

さらに同論文でリシツキーは、言葉には「二つの次元」があると指摘する。その二つとは時間の機能を持った音としての話し言葉と空間の機

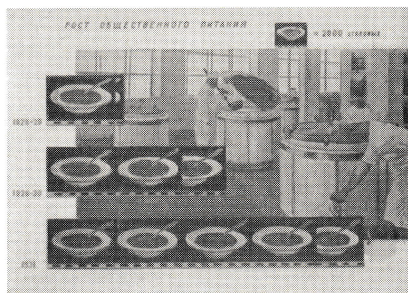
能を持った文字である。そして彼は後者の機能の可能性は十分に発揮されておらず、探求の余地があると考えた。彼によれば、この言葉の二つの次元を先んじて探求したのはアメリカで出版された本であり、それは二つのことばの機能の「相互関係を改革した」。通常、アルファベットやキリル文字のような表音文字は、音としての言葉の機能が先にあり、それを形としての文字で写し取ったものだが、アメリカの本は後者が主役となっているとリシツキーは考える¹⁴⁾。

リシツキーは、言葉の機能を根本的に捉えなおし、形としての文字の機能を前景化させたグラフィックデザインによって、一目で理解可能でリテラシーの低い者でもアクセスしうる表現を実現できると考えた。リシツキーとノイラートが共通して目指していたのは、視覚的造形によって誰でも理解することのできる、普遍的な情報伝達の方法を可能にすることだった。リシツキーにとってウィーンメソッドは、自分の目指していたことに先立って、数値（量）の視覚化を成功させた事例として見えたに違いない。

2. イゾスタトと図解統計

では図解統計はソヴィエトではどのような発達を遂げたのだろうか。ノイラートがモスクワに滞在する以前にすでにソヴィエトではインフォグラフィックスが実践されていた¹⁵⁾。1931年のノイラートの訪問に先駆けて、レニングラード造形出版局はインフォグラフィックスに携わる部門を組織した。同年この出版局からイワン・イワニツキー監修のもとインフォグラフィックスによってデザインされた72枚から成るポスターおよび絵葉書のシリーズ「技術・経済に関して先行する資本主義諸国に10年で追いつけ追い越せ」¹⁶⁾が発行された【図4】。ポスターでは、第一次五カ年計画でソヴィエトがいかに経済成長を成し遂げたかがグラフによって示されている。このシリーズでは「キノレント」と呼ばれる独自の絵グラフが用いられている。「キノレント」とはイラストを映画のフィルム状につなげて量を相対的に示す一種の棒グラフである。イラス

トレーションの要素の強いこのシリーズは、絵による棒グラフという手法は同じでありながらも、記号のような簡素な図によって表されるノイラートのウィーンメソッドとは似ても似つかない。また、ノイラートの本はインフォグラフィックスのみで構成されるのに対し、このシリーズでは背景のイラストレーションが目立っている。



【図4】

イゾスタに移ったイワニツキーは1932年に『図解統計学とウィーンメソッド』¹⁷⁾を出版する。そこでイワニツキーはウィーンメソッドを詳細に紹介すると同時に批判してもいる。彼はウィーンメソッドの弱点は数値を正確に表せないことだとする。ウィーンメソッドでは、せいぜい半分の数値を表す際に半身の人間を示すことしかできず、正確な数値の比較ができない。また、小さい人間と大きな人間を並べて示すだけでは両者の間の正確な量の差はわからない。1936年にイゾスタから出版されたアルバム『数字におけるソ連邦の青年たち』【図5】¹⁸⁾では細かい数値が書き込まれ、ノイラートの方法の欠点に対する解決策が実現されている。

イワニツキーはこの本の冒頭で次のように述べている。「図解統計は、それを社会主義建設の時代に全ての労働者階級が手中にすることで、マス・アジテーションの強力な武器とならなければならない。これはレーニンの直接の遺訓である」¹⁹⁾。ソヴィエトの図解統計は事実を示すデータである以上に、プロパガンダの手段であることが最初から目指されて



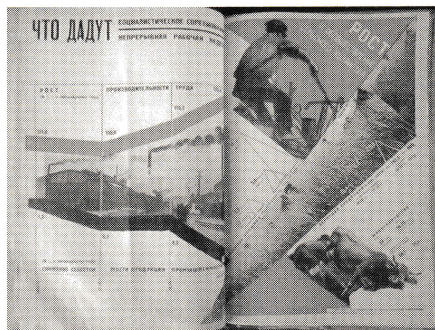
【図5】

いたのだ。

実際、ソヴィエトではフォトモンタージュやコラージュが1920年代から盛んに制作されていた。例えばロトチェンコの「ボリシェヴィキの歴史」(1925-26)【図6】のように、写真と資料でソヴィエトの歴史を表した展示物が制作されていた。また、クルツィスも雑誌『30日』(1929年第11号)において農産物や電力、石油の生産量の増加の数値のグラフをフォトモンタージュとともに示す誌面デザインを行なっている【図7】。ソヴィエトでは抽象的なシンボルで事物を示すウィーンメソッドに先駆けて、社会の現実を伝えるドキュメンタリーとしてのフォトモンタージュの手法が発達していたのである。

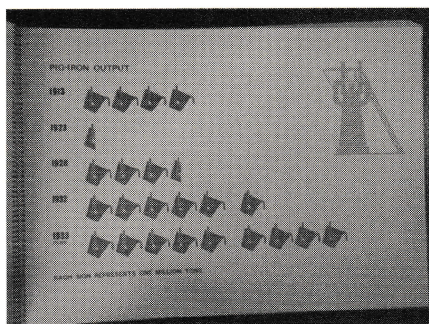


【図6】



【図7】

イズスタトが1933年に出版したアルバム『五カ年計画のもとでのソヴィエト連邦の再建設』²⁰⁾では、スターリンの5カ年計画でソヴィエトがいかに生産量を向上させ、生活を豊かにしたかが統計的に示されている。労働人口、石油や鉄鋼の輸出力、電力供給、輸送量、国営農場の面積、新たに建設された街、出版点数など、農業および工業生産、文化や福祉などあらゆる分野にわたるソヴィエトの発展が、イラストを用いた図によって示されている。人物や生産物を示す絵は記号のようにシンプルで抽象化されており、絵の数によって量の増加が示されている。また本全体を通して統一された絵グラフが用いられている。これらの点から『五カ年計画のもとでのソヴィエト連邦の再建設』にはノイラートのウィーンメソッドが厳格に適用されていることがわかる。

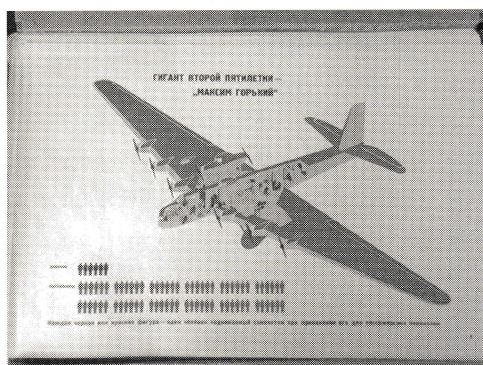


【図8】

ただし注目すべきことは、出版時点ではまだ明らかになっていない1933年の数値が「計画」として示されていることである【図8】。このアルバムに限らず、ソヴィエトの図解統計ではしばしば「計画」という数値が書き込まれている。これは実際のデータではなく、予想される生産量あるいは達成すべき数値目標である。いわば未来の理想が現実の科学的データに接続されて示されているのである。

このアルバムには英語とロシア語の二つのバージョンが存在する。他にも1930年代に発行されたアルバムには英語のものが多数存在する。このことからわかるのは、アルバムは国外の読者を想定し、その目的の一

つは社会主義国ソヴィエトの発展と五カ年計画の成果を国外に報せることであった、ということである。研究者のエリカ・ウルフは多言語で出版されたグラフ雑誌『建設のソ連邦』が、国内の労働者のみならず、ソヴィエトにシンパシーを寄せる海外のインテリ層や、スターリン時代のエリートが読者層として設定されていたと指摘している²¹⁾。『建設のソ連邦』よりも素材の質が高くデザインに凝った高価なアルバムは、おそらく一般的な労働者よりも国内外のエリート層を読者として想定していたと考えられる。

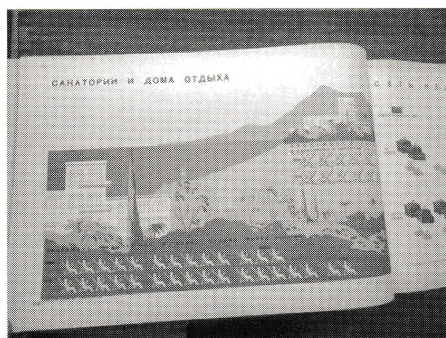


【図9】

1934年にイズスタトから出版された『航空と航空術』²²⁾はページが綴じられたアルバムではなく、バラバラのページがファイルに入ったポートフォリオの形式になっている。このアルバムでは、旅客や輸送量、飛行高度や飛行速度といった統計的な量が示されるのみならず、各飛行機の内部の構造が図解されている【図9】。抽象的なウィーンメソッドとは異なり、図はより具象的で正確である。ここでは統計を示すという目的だけでなく、イラストとしての魅力が追求されている。この点においてはウィーンメソッドからは逸脱しているものの、アルンツはこのアルバムをソヴィエトのインフォグラフィックスの中でも最も成功した例と考えていた。

1934年、ノイラートはモスクワのイズスタトとの協力関係を停止する。

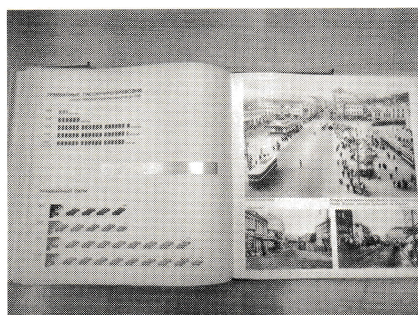
その後ソヴィエトの図解統計はウィーンメソッドから離れ、よりデザイン性の強いものになった。たとえば、『ソヴィエト社会主義共和国連邦の社会主義建設』²³⁾ (1936) や『スターリンの社会主義憲法』²⁴⁾ (1937) 【図10】では図解統計以外にも、イラストや写真が多数用いられている。特に前者においては『建設のソ連邦』のようなフォトドキュメンタリーがメインとなり、その中に図解統計が挿入されている。一冊全てウィーンメソッドで構成されることを前提としていたノイラートの手法とは異なり、これらのアルバムの中ではウィーンメソッドは、ブックデザインの様々な手法の一部となっている。イラストレーションのページは色彩の数が限られていて抽象的であるため、図解統計のページと極めて似通っており、全体として統一が取れた印象を受ける。しかしそれゆえにアルバム全体の中で図解統計のパートが際立つことがなく、様々な意匠の一つとなっている。ノイラートが「メソッド」として確立したウィーンメソッドはソヴィエトの図解統計においてはその特権性と独立性を失っている。いわば、イラストレーションが中心だったかつてのレニングラード造形出版局の方法が洗練され、ウィーンメソッドがその中へと取り込まれたといえよう。



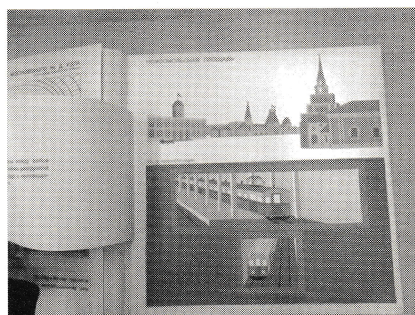
【図10】

ロトチェンコとステパノワによる『モスクワ再建』(1938)²⁵⁾では様々なブックデザインのための意匠の一つとして図解統計が利用されている。

『モスクワ再建』はカガノヴィチによるモスクワの都市整備を記念したアルバムであり、フォトモンタージュをメインとしながら、アイソタイプ、絵地図といった手法が総合的に用いられている。たとえば、路面電車の乗客数や車庫の増加がバスの絵の図解統計で示されており、その隣の頁には、道幅が拡張され、舗装された道路の写真が昔の通りの写真と並べて示される【図 11】。帝政時代の過去と社会主義時代の現代を写真によって対比させる手法はアルバムの中でよく用いられているが、ここでは過去と比較した時のソヴィエトの発展が、図解統計のデータによって裏付けられている。また、モスクワへの水の供給や、河川での物流が地図と組み合わせたアイソタイプによって示される。さらにこのアルバムでは、インフォグラフィックスとページを組み合わせた造形的なトリックが試みられている。コムソモール広場を図示したページでは、読者が折り畳まれたページをめくることによって、地上を鉄道が通り、二線の地下鉄が地下で交差する広場の様子が明らかになる【図 12】。ロトチェンコとステパノワのブックデザインでは、ページを操作することで読者を能動的にし、アルバムの中に引き込む工夫がなされている。視覚的に情報を伝達する手法は図解統計に限られない。このアルバムにおいて図解統計は、アルバムにアクセントを与え、読者を飽きさせない工夫の一つとなっている。



【図 11】



【図 12】

ソヴィエトの図解統計はノイラートのウィーンメソッドから乖離した

結果、イラスト、フォトモンタージュやその他のデザイン上の仕掛けと同じく、読者の注意を惹き付けるための手法の一つとして機能している。ノイラート、そしてリシツキーが抱いていた、抽象と図の力を借りて情報を視覚化し、誰にでもわかりやすく科学的な情報を伝達することはもはや図解統計の直接的な目的ではない。1930年代後半のソヴィエトのアルバムにおける図解統計は、既存のプロパガンダを視覚的な形式で反復し、ソヴィエトの発展を華々しく示すスペクタクルの手法の一つとなっている。

1935年にノイラートとアルンツはソヴィエトとの関係を停止する。イゾスタトは1940年頃解体させられ、同じ場所に事務所を構えたゴスプラン出版局にその仕事は引き継がれた²⁶⁾。

3. おわりに——社会主義リアリズムの中の図解統計

上記で見たように、ノイラートのウィーンメソッドとは異なり、ソヴィエトの図解統計は、イラストレーションの要素が強く、ブック・デザインの手法の一つとして用いられ、現実の数値でない「計画」も記述されるという特徴を持っていた。1930年代のソヴィエトでは、社会主義リアリズムが公的な芸術様式とされ、当時出版されたアルバムやイゾスタトの出版物も多かれ少なかれその影響を受けていた。図解統計をスターリン時代の視覚的表象として見たとき、それはどのような役割を果たしていたのか、最後に当時の状況から考察したい。

「ファクトの文学」を標榜した『新レフ』に代表されるように、ソヴィエトでは1920年代後半から文学や映画や写真の分野でドキュメンタリー運動が盛んになった。複製技術の発達に後押しされることで映画と写真は芸術における主要なジャンルとなった。研究者のアストリッド・パプジャンは、セルゲイ・トレチャコフの作品や批評、ジガ・ヴェルトフの「映画眼」による作品、マクシム・ゴーリキーが発行した雑誌『われわれの達成』のプロジェクトなどを考察し、1921年から1934年にかけてロシア文化の中でドキュメンタリーの美学が極めて重要な役割を果たした

ことを指摘し、この時期を「ドキュメンタリー・モメント」と名付けている²⁷⁾。そして1930年代後半になると、新たな美学の発見として始まったドキュメンタリーへの志向は、社会主義リアリズムの神話を形成する強力な武器となり、社会主義リアリズムの中に溶解したと指摘する²⁸⁾。1930年代のアルバムもまたこの「ドキュメンタリー・モメント」の枠組みの中で生み出されたといえる。

ドキュメンタリーの美学が社会主義リアリズムの「武器」となった原因は、そもそもドキュメンタリーに内在する性質にある。パパジアンはソヴィエトのドキュメンタリーへの志向を考える上で、映画研究者のビル・ニコラのドキュメンタリーの「二重状態」参照する。ニコラによれば、ドキュメンタリーは世界から得た「証拠」であると同時に「世界についてのディスクール」であるという²⁹⁾。この二重性は写真によく表れている。写真はドキュメントであり、現実の証拠となる一方で、現実には何が起きているかを示すディスクールでもある。とりわけスターリン時代 of アルバムは、個々の写真を組み合わせるフォトモンタージュによって、五カ年計画によって発展したソヴィエトというディスクールの生み出している。ここでは証拠としての写真の性質が、ディスクールの真実性を保証する。そして科学的データとしての図解統計もまた世界から得た証拠であると同時に、ソヴィエトの現実について語るディスクールという二重の役割を負っている。図解統計は写真と同じ役割をアルバムの中で果たしているといえる。

当時公式の芸術の様式とされた社会主義リアリズムでは、現実をその革命的発展において真実らしく具体的に描き出すべきとされる。アンドレイ・シニャフスキーはこの点から、社会主義リアリズムは現実を描くのではなく、「理想像に立脚しており、現実をこの理想像に擬する」と指摘した³⁰⁾。社会主義リアリズムで描かれるのはあくまでも未来の理想であるにもかかわらず、ドキュメンタリーを社会主義リアリズムに取り込むことによって、現実そのもの、「歴史的事実」あるいは「客観的真実」³¹⁾として提示される。実際のデータとともに近い未来における「計

画」をも示すソヴィエトの図解統計は、現実そのものに見せかけて理想を提示する、この社会主義リアリズムがドキュメントを取り入れる際のトリックの一つであるといえよう。

では五カ年計画による社会主義の発展というスターリン時代のアルバムのディスコース、五カ年計画によって発展した輝かしい社会という理想像は誰に向けて記述されたものなのか。それはアルバムの読者として想定されていた五カ年計画を推し進めたスターリン時代の新たなエリートたちである。ウルフはこの時代を代表するアルバム『建設のソ連邦』について次のように記述している。

構成主義的なモンタージュは、スターリン時代のエリートが喜んで受け入れるような、新しいソヴィエト政権の幻想的イメージを生み出すために使われている。『建設のソ連邦』のモンタージュによるフォト・ルポルタージュは、ソヴィエト連邦における社会主義建設の仕事において新しいソヴィエトの上流階級が達成したことを、ある種の形で視覚的に肯定することに役立った。

『建設のソ連邦』と同じくスターリン時代のアルバムは、社会主義建設を主導するエリート達が自ら成し遂げた偉大な仕事を認識し、現実のものとして実感するための装置であった。スターリン文化研究者のエヴゲーニー・ドブレンコはゴリキーの『われわれの達成』と『建設のソ連邦』のプロジェクトを例に、社会主義建設に携わった労働者が社会主義建設を記述した雑誌によって初めて自らの仕事と役割を知るという「自己参照性」のメカニズムを指摘している³²⁾。スターリン時代のアルバムは、とくにスターリン時代のエリートたちの自己参照のための装置であり、図解統計は科学的データというドキュメントであることによって、それにリアリティを与える役割を果たしたのである。

このようにしてソヴィエトの図解統計は、誰にでもアクセス可能な科学的で普遍的な情報伝達のためのメソッドというノイラートとリシツ

キーの初期の志向を離れ、建設に関わった人々がその華々しい成果を認識する「自己参照」のための表象として、独自の発展を遂げたと言える。

注

- 1) Карасик. М. С. Парадная книга Страны Советов. М.: Контакт-культура, 2007. С 3.
- 2) 著者はこの展覧会は未見であるが、次のサイトに紹介されている。
<https://statearchive.ru/1111>, <https://www.nashabolovke-gallery.com/izostat>
(12 November, 2021 accessed.)
- 3) 伊原久裕「象形文字からアイソタイプへ、視覚人間オットー・ノイラートの軌跡」『オットー・ノイラートとその時代』武蔵野美術大学資料図書館、2007年、90頁。ノイラートの活動に関してはこの書籍および次の文献を参照。Nancy Cartwright, Jordi Cat, Lola Fleck and Thomas E. Uebel, *Otto Neurath: Philosophy Between Science and Politics* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996).
- 4) Nancy Cartwright, et al., *Otto Neurath*, p. 65. 寺山祐策「ゲルト・アルンツ ISOTYPE に形を与えた男」『オットー・ノイラートとその時代』、102頁。アルンツに関してはこの論文を参照した。
- 5) Nancy Cartwright, et al., *Otto Neurath*, p. 69.
- 6) Hadwig Kraeutler, *Otto Neurath. Museum and Exhibition Work: Spaces (Designed) for Communication* (Frankfurt am Main: Peter Lang GmbH, 2008), pp. 148-149.
- 7) Nancy Cartwright, et al., *Otto Neurath*, p. 75.
- 8) オットー・ノイラート『アイソタイプ』永原康史監訳、ビー・エヌ・エヌ新社、2017年、19頁。Nancy Cartwright, et al., *Otto Neurath*, p. 75.
- 9) ノイラート『アイソタイプ』、115頁。
- 10) イゾスタトでは最初に、マリー・ライデマイスターがノイラートの秘書兼代理を務め、フリードリヒ・バウアーマイスターが研究の仕

事を担当し、グラフィック部門ではエディト・マツアリクがリーダーとなり、画家のエルヴィン・ベルナートが参加した。ウィーンの博物館と同じようにバウアーマイスターらがトランスフォーマーの役割を果たし、流れ作業でグラフが作成された。ロシア人の作業団のリーダーを務めたのは、ニコライ・クルガノフ、セルゲイ・タブレニノフ、V. シャトフ、カプランだった。ロシア人の研究協力者としてイワン・イワニツキーとマリヤ・オルロワも参加した。Кричевский В. Г. Изостатистика и «Изостат» // Проект Россия. 1996. № 1. С. 62–69. <https://prorus.ru/interviews/izostatistika-i-izostat/> (21 Jan. 2021 accessed.)

- 11) Ivan V. Sautin, Ivan P. Ivanitsky, edited by Lissistzky, *USSR: An Album Illustrating the State Organization and National Economy of the USSR* (Moscow: Scientific Publishing Institute of Pictorial Statistics, 1939).
- 12) Эль Лисицкий. Наша книга // Эль Лисицкий Фильм Жизни. М.: Новый Эрмитаж “Один,” 2004. С.135.
- 13) Там же.
- 14) Там же.
- 15) Лаптев В. В. Советская информационная графика 1930-х годов // Вестник СПбГУ. Сер. 15. 2013. Вып. 1. С. 226.
- 16) Иваницкий И. П. Догнать и перегнать в технико-экономическом отношении передовые капиталистические страны в 10 лет. М. Л.: Огиз - Изогиз. Отд. изобразительной статистики, 1931.
- 17) Иваницкий И. П. Изобразительная статистика и венский метод. М. Л.: Огиз-Изогиз, 1932.
- 18) Молодежь СССР в цифрах. М.: Всероссийский. ин-т изобразительной статистики ЦУНХУ Госплана СССР, 1936.
- 19) Иваницкий. Изобразительная статистика и венский метод. С. 4.
- 20) Reconstruction of the Soviet Union Under the Five-Year-Plan. Всероссийский ин-т изобразительной статистики, советского стр-ва и хоз-ва при ЦИК СССР, М.: ОГИЗ-ИЗОГИЗ, 1933.

- 21) *Ерика Вольф*. «СССР на стройке»: журнал и его читатель // СССР на стройке: иллюстрированный журнал нового типа. М.: Агей-Томеш, 2006. С.11-23.
- 22) *Авиация и воздухоплавание*. Всесоюзный ин-т изобр. статистики советского стр-ва и хоз-ва при ЦИК СССР. М.: ОГИЗ-ИЗОГИЗ, 1934.
- 23) *Социалистическое строительство Союза Советских Социалистических Республик*. М.: Всесоюзный институт изобразительной статистики ИЗОСТАТ. ЦУНХУ госплана СССР, 1936.
- 24) *Сталинская конституция социализма*. М.: Всесоюзный институт изобразительной статистики ИЗОСТАТ. ЦУНХУ госплана СССР, 1937.
- 25) *Москва реконструируется*. Институт изобразительной статистики советского строительства и хозяйства ЦУНХУ госплана СССР (ИЗОСТАТ), 1938.
- 26) *Лантнев*. Советская информационная графика 1930-х годов. С. 226.
- 27) Elizabeth Astrid Papazian, *Manufacturing Truth: The Documentary Moment in Early soviet Culture* (Dekalb, Illinois: Northern Illinois University Press, 2009), p. 4.
- 28) *Ibid.*, p. 9.
- 29) *Ibid.*, p. 5.
- 30) 「社会主義リアリズムとはなにか」『現代ロシア抵抗文集3 シニャフスキー・エッセイ集』内村剛介、青山太郎訳、勁草書房、1974年、157頁。
- 31) Papazian, *Manufacturing Truth*, p. 19.
- 32) *Евгений Добренко*. Политэкономия соцреализма. М.: Новое литературное обозрение, 2007. С. 364-365.